

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0475102083		
法人名	社会福祉法人 仙台市社会事業協会		
事業所名	グループホーム楽庵		
所在地	仙台市青葉区葉山町8-1		
自己評価作成日	平成27年 9月 22日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kai gokensaku.jp/">http://www.kai gokensaku.jp/</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成27年10月15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

基本理念:「希」「笑」「和」「絆」日々の暮らしの中で、この言葉の存在を確認しながら、利用者様一人ひとりのペースに合わせた生活が継続できるよう支援している。ホーム独自の「生活シート」に基づき、本人の言葉・思いを拾い、本人の言葉として書き込み、個人の能力を十分に発揮できるようチームで検討・見直しを行ない、利用者様と取り組む人々を包み込むケアを実践している。また、併設する仙台楽生園ユニットケア施設群および葉山地域交流プラザが企画する様々な行事等に参加することができ、館内の関係者・利用者・地域の方々との交流の場になっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

北仙台駅から徒歩10分程度に「仙台楽生園ユニットケア施設群」がある。ホームは「葉山地域福祉総合サービスエリア」の1階にある。2階は地域開放エリアでボランティア活動や地域の発表会を行うなどの交流の場になっている。入居者は、互いに顔なじみも多い。地域住民の信頼も厚く、中学生などの体験学習を受け入れている。夏祭りは、地域住民の楽しみである。法人発行の機関紙(花かご)は年2回あり、入居者の様子を写真入りでお知らせしている。目標達成計画に掲げた「看取り介護に係る意思確認書の成文化」と「施設群全体の防災訓練を実施する」について達成した。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 グループホーム楽庵)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員は、理念「希・笑・和・絆」を意識し、実践している。自分らしさを大切にする「希望」を、日々の生活に「笑い」を、「和む」居場所作りを、家族や地域との「絆」を深め、地域社会での生活の継続が実現できることを目指している。	ホーム独自の理念である「希・笑・和・絆」を、入居者の個人別生活シートに掲げ、入居者の希望と合わせて理念に沿ったケアの実践につなげている。半年に一度、個々の記録を見直している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設の館内全てを地域の始まりとして各種行事の際には時間の共有を図ってきた。また、地域の方々への認知症の理解啓発活動や運営推進会議も地域との繋がりにして機能している。	施設内は通学路となっており、登下校時に声掛けするなどしている。「子ども110番の家」として見守っている。2階は「地域開放フロア」で、喫茶室や会議室が有り、地域住民の交流の場所となっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議を活用したお茶会や、地域に向けての認知症サポーター養成講座の支援を通して地域の方々との交流を持つことが出来ている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は2ヶ月に一度、開催している。各分野の皆様から意見を頂戴し助言を頂いている。	3つの町内会に隣接して、各町内会長・荒巻消防団長・ボランティアなど多彩なメンバー構成である。地域包括からの呼び掛けで、地域マップを作成し、地域の全家庭に配布した。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	集団指導や研修会などにも積極的に参加してきている。不明な点などは指導を頂き協力を仰ぐこととしている。	市担当者とは、直接話し合いを持ち、インフルエンザの対処の仕方や事故の報告など指導を受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入職時には身体拘束の研修を受講している。また、施設内での研修や外部の研修にも参加し学ぶ機会を作っている。意思を尊重した行動を認め、スピーチロック等もなぐすようにしている。	毎月(第3火曜日)のホームの全体会議の前に、身体拘束等の職員の研修し、意識の共有を図っている。「ダメと言わない」や「行きたい所へ行ける」事が、信頼関係に繋がるなど、ケアに活かされている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部・外部の研修を受講し学びの機会を作っている。日常のケアの中で利用者との関わり方が適切であったか、尊厳は守られているか、常に注意し合えるような関係作りを心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、利用者1名が成年後見制度を活用している。研修などを通して知識を深めている。今後も増加が予測される事案であるので内外部の研修等に積極的に参加していきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には十分に時間をかけて理解・納得を得て頂くように進めている。解約・改定等の場合にも十分に状況を判断しながら、納得・同意を得られるように心掛けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に意見箱を設置している。しかし全く活用されていないため、面会の際のコミュニケーションや電話連絡などの機会を通して意見を伝えやすい関係作りを進めている。	家族総会を年1回に開き、半数以上が参加している。食事会を兼ねての話し合いは、家族の思いを知る機会になり、「職員の笑顔と声掛けにより、入居者が穏やかに家族との関係も改善された」の声があった。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度代表者参加のもと会議を行っている。また人事評価の面接の機会を通して意見を吸い上げる体制を作っている。	管理者はホームの管理業務は職員と分担している。管理者は「言ったでしょ」は口にしない事で、些細な事でも、24時間体制で対応し、職員の信頼を得ている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事評価制度の導入で正確な職員の勤務状況の把握に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設全体として、現場教育システム(チューター制によるOJT)を導入している。OFF-JTも各種行われている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	積極的に各種研修に参加させていただいて交流を持っている。また、各種研修の外部研修生も積極的に受け入れ、意見交換の機会を持つようになっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	疾患の特性をふまえて入居前の事前調査の段階から、抱えている生活の困難さやニーズ、本人の希望・要望をつかみ、ご家族の協力を得て本人の安心に繋がるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族と話し合う機会をできるだけ多く設けて信頼関係を築き、意向に沿った支援ができるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	状況の把握に努め、必要としている支援を提供している。入居の段階では前関係機関からの情報提供をいただき、ケアの継続性を心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気大切に、家事活動などでは自発的に行う様子もあり、支え合いながら共に過ごしている。様々な方向から感謝の言葉が聞こえてくるホームを目指している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会活動や各種行事などはご家族の協力を得て開催し、一緒に家事活動などを行う場面も見られている。本人とともにご家族にも楽しんでもらえるように心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	希望の場所への外出や、知人の訪問などにもできるだけサポートしている。手紙や電話もできるように手助けを行っている。	入居者の多くは町内の方で、以前より法人の施設を利用し、顔なじみも多く、馴染みの場所となっている。友人が会いに来たり、手紙が届く入居者も居る。職員の「いつでも帰れるよ」は、入居者を安心させている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	家事活動を共に行うことや、イベント事に常に関係に重きを置くなど、各々が楽しめる様、共同生活に対し支援を行なっている。様々な場面で、利用者同士と一緒に過ごし、支え合える環境作りを心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後の現状確認をおこなっている。また、退去されたご家族からその後の生活についての相談を受けることもある。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	全ての意向に沿った生活はできていないが、日頃の表情やしぐさ、会話からより多くの事を掴み取り、また、思いを表現して伝えられるようにしている。	「コミュニケーションはとるものではなく、一緒にするもの」とは管理者の言葉である。入居者と一緒に新聞を読み「先生、これはどういうこと」など話すようにし、テレビは点けず、一緒に体操したりしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人家族からの情報収集に努めているが、職員間での活用が十分ではないと感じ、情報の共有することの重要性を感じている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人の能力やペースに合わせた生活を目指しており、出来る事、出来ない事の把握を職員間で共有するよう心掛けている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスでの検討にこだわらず、気にかかる事があれば話し合い解決する体制を心掛けている。関係者からの意見を聴くことや事業所内での話し合いの機会をより多く持つ事が必要であると感じている。	個人別生活シートに(食事・入浴・更衣・排泄など8項目)を記入し、ケアに活かしている。毎月行われる全体会議でカンファレンスを行い、見直している。表情の変化等を計画書に盛り込み、家族に説明している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアの実践や利用者の言動・状況を経時的に個別に記録することを心掛けている。誰でも理解できる文章表現能力を身につける努力が必要である。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々状況の変化を見極め、ご家族と協力し、話し合いながら、要望に応じた支援が出来るように心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアとの交流や館内の行事での交流を本人の意向に沿って支援できるように心掛けている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力病院にとらわれず、かかりつけ医とのつながりを活かすようにしている。状況に応じて適切な医療を受けられるように、協力・連絡調整を行っている。	それぞれが希望するかかりつけ医を受診し、家族が同行している。結果は口頭で聞き記録している。管理者は看護師資格を有し、緊急時は協力医との連携もある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	24時間オンコールの体制を確保し、健康管理のみでなく、日常の場面に看護師が関わるようにしている。また医療機関との連絡調整や、情報共有・提供を心掛けている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院側・家族との話し合い、状態把握や情報共有・提供を心掛けている。身体状況の変化に速やかに対応、アドバイス出来るように面会やお見舞いを利用し近況の把握に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	指針の作成や同意書による確認をとっている。入居者・家族の意向に沿ったケアができるように体制を整えている。職員についても重度化に対応できるケアの質向上に努めている。	入居時に「重度化対応及び看取りに関する指針」を説明し、同意を得ている。入居者の変化に応じて、家族や入居者に「終末期の医療についての意思確認書」と「グループホーム楽庵の看取りに関する医師意見書」に同意を取り、職員のケアに繋げている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時の状況も情報共有や経験の共有に努めるようにしている。応急手当や初期対応のトレーニングも進めている。時間帯を問わず、緊急連絡網を活用し人員の協力体制も築いている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	施設全体として地域と契約し、災害対策の構築を進めている。3.11震災以後、備蓄品のリスト作成や生きたマニュアル作りを目指している。定期的な避難訓練の実施により、あらゆる状況時にも対応できる力を身につけることを目指している。	年4回避難訓練を実施し、内1回は地震を想定した。訓練は施設群全体として行った。消防署からは、ホームとして「緑色のランプ」を確認する事(火災発生)の指導を受けた。地域の協力要請をお願いしたい。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	配慮したケアを心掛けているが、より個人の尊厳やプライバシーに関する情報の取り扱いについて慎重に進めていきたい。	入居者が一番うれしい呼び方で呼んでいる。最高齢者は「～ちゃん」「～先生」自ら「お母さん」と呼ぶ方も居る。職員は1対1のエスコートを心掛けて、「行きましょう」とさり気なく耳元で話し掛けトイレへ誘導している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その人の残存能力に合った選択肢を用意したり、表出のタイミングを待つなどの工夫を心掛けている。また、その思いを出来るだけ具現化できるよう努力していきたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	決して強制することなく、一人ひとりの生活のペースや希望を活かすように心掛けているが、勤務体制などで希望に沿った支援ができない場面がある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節やその時の本人の希望を取り入れたその人らしい身だしなみを目指している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	その人に合った役割を見つけ、職員と一緒に調理し、盛り付け、共に食事をしている。また、出前や外食など、食事を各々の嗜好に合わせて、楽しみなものになるイベントを実施している。	朝食と夕食は法人の調理室から届けられ、入居者も一緒に盛り付けや配膳をしている。昼食はホームの職員が、入居者一人ひとりに合わせて、刻み食やムース食など作っている。月2回は献立を選択できる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個人の状況や嗜好に合わせた食事形態などを考慮するようにしている。また夜間などでも状況に応じて水分・栄養の摂取ができるように心掛けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の口腔ケアを実施している。また、施設の歯科往診を利用するなどしての対応を働めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、個々の排泄パターンやサインに合わせた誘導を実施している。また、画一化しない本人の排泄状況に合ったパット等の使用などをチームで考えている。	排泄チェック表が有り、職員は色分けで記入している。自立者が1名で、おむつ使用者は居ない。入居者の様子で、さり気なくトイレへ誘導し、夜間はパッドとナースコールを利用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表を活用しサイクルや状況の把握に努めている。オリゴ糖や牛乳・ヨーグルトの摂取を勧めたり、運動や水分摂取も勧めているが薬の使用が欠かせない状況である。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	頻度や時間やタイミングなど、個々の希望にできるだけ沿った支援を目指しているが、難しい状況がある。	入浴は2日に1回で、午後に入る。お湯は一人ひとり取り替えている。入居者の好みに合わせて、ピンク色にしたり、担当者を男性に替えたりするなど、要望に応じている。石鹸などは個々に用意している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々のペースや身体状況に合わせての安眠・休息を心掛けている。日中の活動との関係の再考も必要である。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬一覧表や服薬チェック表を活用し、確認を行い、誤薬の無いように努めている。ご家族やかかりつけ医との連携により、薬のコントロールを実施しているケースもある。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	楽しみや笑顔を多く生む暮らしを目指し、個々の思いを推し量りながら支援しているが、まだ工夫するところがあるのではないかと感じている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に応じて、お花見、紅葉鑑賞、ショッピングモール、外食などの外出を行っている。外出支援から学ぶことも多く、会話などから希望を引き出し、個人を尊重した場面作りが大切であると感じている。	月1回位行事として車椅子の方も一緒に出掛けている。天気の良い日は、午前中にホーム3階にあるスペースへ日光浴に行く。ホームの近くにコンビニが複数有り、職員と入居者が一緒に買い物に出掛けている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自己管理が可能な方には、自分で支払いをすることを勧めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	常時、電話の使用をできるように支援している。また、手紙を書くこと・出すことのサポートも行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂には季節を感じられる花や利用者の作品を飾ったり、中庭では草花を育てるなど、季節を感じながら居心地良く過ごせるように配慮している。空間やくつろぎの配慮については再考の必要性があると感じている。	リビングの壁に貼ってある落ち葉の風景は、入居者と職員と一緒に作成した。银杏の葉は切り抜き、コスモスの花は折り紙で作成者の名前が書かれていた。穏やかな雰囲気の中、入居者と職員の笑い声が聞こえ家族も安心している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	個々の利用者が、思い思いの場所で時間を過ごせるような工夫を心掛けている。食堂で利用者同士が一緒に時間を過ごしたり、リビングを利用して一人で過ごす姿も見られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に馴染みの家具や小物を持ち込んで頂けるように説明している。行事の際の写真や、季節の花や飾ったり、装飾をみんなで作ったりすることも心掛けている。	居室はフローアードベッドが置かれている。使い慣れたタンスなどが持ち込まれている。壁には、自分が作成したカレンダーや切り絵が飾ってある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	身体の残存能力を活かして最後まで自立と、自立を尊重した共生の場所を目指して生活を作ることを心掛けている。		